

# 要 請 書

平成20年1月18日

最高裁判所第二小法廷様

「高知の白バイ事故。この現実を知ってください。」

片岡晴彦さんを支援する会

平成18年3月3日。高知県春野町の国道56号線で高知県警の白バイと仁淀川町スクールバスの衝突事故がありました。この事故は白バイ隊員が亡くなれるという重大な結果となっています。

事故後、スクールバスの運転手の片岡さんは免許を取り消され、11月に業務上過失致死罪にて起訴、19年1月から高知地裁にて公判開始、6月に禁固1年4ヶ月の地裁判決が下されました。高松高裁の控訴審も即日結審となり、10月30日に高裁判決がでて控訴棄却となりました。現在最高裁判所に上告中です。

これまでの裁判の過程において不自然で、納得のいかないことが数多く噴出しました。

それは警察・検察の証拠捏造と、それを検証もしないで検察の主張を丸呑みした判決だということです。裁判のあり方自体にも国民からの批判が噴出しています。

以下順を追って説明いたします。

事故当時、片岡さんは卒業遠足の中学3年生23名と3名の教師をバスに乗せて、交差点を横断して反対車線手前の中央分離帯付近で停止していました。そこへ右折車線を走行してきた白バイが衝突してきた事故でした。片岡さんは土佐署での取調べではそのように事故の状況を主張しました。

ところが 18年10月の高知地検での事情聴取の際に、片岡さんに突きつけられた事故検分調書や片岡さんの供述調書の内容は、片岡さんの主張とは全く違うものとなっていたのです。

警察の調書では、片岡さんの運転するバスは、「安全確認不足のまま国道に進入し、走行してきた白バイを跳ね飛ばして、隊員を死亡させた」となっていました。当然、片岡さんは事実と違うと激しく抗議をしたのですが、検察官は受け入れてくれず、ある1枚の写真を片岡さんに提示しました。

その写真には道路上に2本の黒い線が写っていたのですが、検察官はそれを『バスのブレーキ痕』であるとして、「あなたは白バイを跳ねた後、急ブレーキをかけて、倒れた白バイを3mも引き摺ったのだ」と言い放ちました。

バスに乗っていた中学生や引率の教師も「停止していた時に衝突してきた」と言っています。停まっているバスが急ブレーキを掛けるはずもなく、ブレーキ痕もつくはずがありません。「このままでは罪をきせられる」と感じた片岡さんは梶原守光弁護士に弁護を依頼し、裁判にて事実を明らかにする決意をしたのです。

高知地裁の公判にて弁護側証人として、バスに乗っていた教師。バスの後ろから事故の瞬間を目撃した品原仁淀中学校長。そして、白バイの高速運転を目撃したBさん達3人が法廷に立ってくれました。交通事故裁判で目撃者が3人も立つということは大変珍しいことです。

しかし 証人達の『バスは停まっていた』と言う証言は、「スリップ痕写真という客観的証拠があるから、証人の証言は信憑性にかける」として採用されませんでした。

それに対し弁護側はその証拠は捏造されたものであるとして、次のような主張をしました。

- 1 仮にバスが動いていたとしてもABS装着車であるからブレーキ痕はつかない。
- 2 仮にABSが作動しなくても、一旦停止後6.5M進んだ地点で急ブレーキを踏んでも1mものスリップ痕はつかない。
- 3 スリップ痕の写真自体の不自然さ(資料参照)
- 4 実際にバスを走行させての实地検証をするべき。

目撃者の品原校長は証言の中でブレーキ痕について、事故後1週間後に現場を訪れたがスリップ痕はなかったと証言しました。品原校長以外にも、事故現場を訪れた人でスリップ痕を見た人がいません。

しかし、高知地裁片多裁判官は、こういった疑問点や証言を検証することなく、「衆人環視の中でスリップ痕捏造はできない」事を理由として却下したのです。

事故後、片岡さんは現場検証もしないままに現場から引き離されて、土佐署に連れて行かれました。片岡さんご不在の間の、警察関係者だけで現場検証が行われていたのです。

およそ1時間後に現場にもどった片岡さんは車から降ろされることも無く、形だけの現場検証が行われましたが、この時に片岡さんは事故現場でスリップ痕を見ていないし、スリップ痕の存在を指摘されてもいません。

事故後半年以上経ってから、地検にて初めて「捏造されたブレーキ痕の写真」を見せられるまでは、片岡さんは相手が亡くなられているということを真摯に考え、事故の過失割合も争うつもりも無く保険会社に対しても最大限の保険金支払いをお願いしたり、1年間の免許取消しの行政処分にも不服申し立てもしていきました。その結果、職業運転手としての職を失い。無職となりました。

しかし、高知地裁片田裁判官は、片岡さんが事実を主張することが反省の色がないとされて「禁固1年4ヶ月」の実刑判決を言い渡したのです。

**片岡さんは3人の証人の証言をもとに、加えて捜査の違法性、ブレーキ痕の不自然さを根拠に、事実の主張をしたのですが、それを反省の色が無いと裁判官に判断されたのです。**

片岡さんは即日控訴しました。

19年10月4日に高松高裁の第1回公判が開かれました。片岡さんは**新しい証拠や証人を用意して、公判に臨んだ**のですが、高松高裁の柴田裁判官はこれらの証拠や証人を下記の理由にて、全て却下しました。そして、即日結審を言い渡しました。

**「(事実関係は)高知地裁で審理は尽くされている」として 控訴は棄却され  
「不合理な弁解をして責任をのがれている」として実刑1年4ヶ月を言い渡されました。**

これでは、二審の意味が無いではありませんか。何のために高等裁判所があるのでしょうか？

弁護側が準備した新証拠とは、交通事故鑑定人による事故をの形態やスリップ痕を物理的に解析した鑑定書や衝突直前に生徒が撮影したバスの車内の様子が写っている写真です。そして、その事故鑑定人や写真を撮影した高校生本人が証言台に立つ予定でした。そして、実際に同じバスを同じ条件で走行させて、事故時のバスの動きを検証したビデオも準備しました。また、実際にスリップ痕といわれるものが20～30秒の時間で同様なものができることも証明しています。

このままでは片岡さんは無実の罪で実刑となってしまいます。また、冤罪事件としてこの事件が進んでいく中で、**当時中学生でバスに乗っていた高校生達は、警察や裁判所を少年少女の前で平気で証拠を捏造する警察や、それになんら疑問を持たない法廷をどのように思っているのでしょうか？**

**(以上の内容については資料のDVDをご覧ください)**

実際に裁判が進んでいくのを目の辺りにした私達には、警察の捜査の方法よりも、裁判自体のあり方に疑問を感じはじめました。

この事件の高知地裁における裁判やその上級審の高松高裁における裁判が正常と言われるものならば、

国民の多くは驚きの声をあげるでしょう。事実、同封しています**署名趣意書に賛同してくれた人がわ  
ずが50日足らずの間に2万5000名もいます。**

マスコミで盛んに取り上げられた薬害肝炎の署名数が4万5000人と聞いています。マスコミでこの事件を取り上げているのは一部であることを考慮しますと、今回の最高裁上告に対する国民の関心が高いことが良くわかります。

警察や裁判所はそれにとって代わるべき組織がない以上は、国民に信頼されるべき組織でなくてはなりません。国民からしてみれば警察・裁判所が信頼に値する組織でなければ、生活に不安を感じることは言うまでもありません。

しかしながら、現実には、交通事故という一番身近に発生しうる事件で、警察や裁判所がこのような対応を取るということが法治国家の日本で起こるとは未だに信じられない思いです。

2万5千名の国民のこの思いをお伝えできればと思います。

下に今回の高裁判決や裁判そのものに対する私達の疑問と警察への不信感を書いています。

高裁判決文を同封していますので、ご参考の上ご一読願います。

## 1、公平な裁判を求めます

私達の友人である片岡晴彦は一審、二審を通じて、公平な裁判を保障されないまま、禁固1年4ヶ月の実刑判決を受けました。交通事故の相手当事者が白バイ隊員の警察官であるならば、裁判所は公平な裁判をしなくてよいのか、一方当事者の片岡晴彦は憲法で保障された公平な裁判を受けられないのかという問題です。

憲法37条1項は「すべての刑事事件において、被告人は、公平な裁判所の迅速な公開裁判を受ける権利を有する。」と規定しており、「公平な裁判所」とは、当事者の一方に不当に利益または不利益となる裁判をするおそれのない裁判所をいい、最高裁判例(S239・5・5)は「公平なる裁判所の裁判」とは「構成その他において偏頗の惧れなき裁判所」を意味するとした。

憲法は「公平な裁判所」を保障することによって「公平な裁判」を保障したのです。およそ、公平な裁判の要請は、民事、刑事を問わず、すべての裁判についていえることですが、日本国憲法が特に刑事事件において、それを憲法上の権利として保障した点を、重視する必要があります。

刑事訴訟法は、公平な裁判所を構成するため、事件について、当事者もしくはそれと利害関係をもつ者、あるいは予断・偏見を抱いている者を、「不公平な裁判をする虞」のある者とし、かかる者の職務執行を排除するために除斥・忌避・回避の制度を設けた。予断排除の原則はこの制度の重要な柱の一つです。

また、最高裁判例が「公平な裁判所」を「構成其他において偏頗の惧れなき裁判所」と定義づけたことは、その構成にとどまらず、刑事手続の構造においても、裁判官に事件につき予断・偏見を抱かせるようなものであってはならないとする趣旨と考えられ、予断排除の原則は刑事訴訟の全体にわたって要請される重要な原則です。

しかし、片岡が被告人となった本件においては、裁判官が予断や偏見を持って裁判に当たったことが明らかで、それは証拠の採用のあり方にも現れており、二審判決文では**「供述者が、第三者であるというだけで信用できるわけではない」**と片岡晴彦側の証人の重要証言を証拠として採用しないで置きながら、同僚白バイ隊員のA警察官の目撃証言を証拠採用するのである。

警察官の言うことならば何でも正しいことだとされるのでしょうか。

捜査機関でもある警察官が当事者となる交通事故の裁判にあつては、一般交通事故の場合よりなお

一層、予断排除の原則は貫かれるべきことであります。

「事実の認定は、証拠による。」と刑事訴訟法317条は証拠裁判主義を規定しております。

これは客観的な証拠であればどのようなものでも事実認定の資料にしてよいということではなく、例えば、拷問によって得られた自白や、捏造された凶器なども証拠であるが、これをも有罪認定の資料にしたのでは、近代刑事訴訟法の一つの基本原則である被告人の権利保護に欠けるのです。

そこで「事実の認定は、証拠による。」とは、事実認定のためには証拠を用いなければならないことはいうまでもないが、その証拠は「適法な」証拠でなければならない、ということを宣言した規定です。しかし、本件において、片岡の有罪を証明するとして証拠採用された「スリッパ痕」や「検察側目撃証言」、「算定書」には合理的疑いが著しく、片岡晴彦や支援者は、そのことを検証実験の結果や第三者の目撃証言などをもって確信を持って主張してきました。

さて、「証拠の証明力は、裁判官の自由な判断に委ねる。」と刑事訴訟318条は自由心証主義を規定しています。裁判官の「自由に委ねる」ということの意味ですが、ここに自由というのは法的拘束力から解放されているということであって、取り調べた適法な証拠の取捨選択および評価については、何らの法的な拘束力も及ばないという趣旨であり、自由が恣意を意味しないことはいうまでもないのであって、証明力の評価にあたり論理法則・経験法則の拘束を受けることは当然といわねばならない。

日常の出来事や事物について、一般に通用している経験法則や論理上の法則に照らして証拠の証明力を評価した結果、その心証の程度が確信に到達したとき、証明があったとされます。

片岡晴彦と弁護士・支援者が、経験法則にのっとり再現実験をあれほど強く要求したにもかかわらず、裁判所が再現実験を行わなかったことは、事故の経験法則を無視したものといえる。

## 2 検察提示の物的証拠やA隊員目撃証言に存在する合理的な疑い

この点について、「疑わしきは被告人の利益に」原則を貫徹した裁判官として知られる木谷明元裁判官は、事実認定をめぐる注意則の一つとして、物的証拠についても捜査官の作為があり得ることを率直に認めるべきであるとして次のようにいっている。

『正義を体現すべき立場にある捜査機関が、犯罪をも構成しかねない証拠物への作為に加担したのではないかと疑うのは情けないことだが、軽々に「そのようなことはあり得ない」と断定するのは危険である。

捜査官も人間である以上、捜査が難航し糸口が見つからなくなると、物的な証拠に作為を加えてでも都合のよい証拠を作出しようとすることがある。また、捜査も人間のすることである以上、そのようなことをするはずはないと断ずるのは適当ではない。

この問題について一番大切なことは、裁判官が被告人側の主張を虚心坦懐に受け止め、疑問点につき十分な審理を遂げた上で判断を下すことである。

**捜査機関の違法行為は、裁判所が指摘しなければ、他にこれを明らかにする者はいない。**私(木谷)は、捜査機関の違法を指摘するのは裁判所の最も重要な責務の一つであると信じていたから、どんなに苦しくてもこの問題から逃げることはしなかった』

『裁判所・裁判官が、「合理的な疑いを入れない程度の立証の有無」に関する認定のハードルの高さを検察官が要請するレベルにまで下げてしまうならば、厳密に犯罪事実が「合理的な疑いを入れないまでに」立証されていなくても、被告人とされた者に対してはどしどし有罪が宣告されてしまうことになるだろう。

そして、そこでは次々と冤罪が生まれることになる。現実には裁判所の検察官に対するハードルは驚くほど低く、最近の裁判官は検察官はごく一通りの立証をただけで、検察官立証は十分であるとして、

今度は弁護人に対して反証を求めるという傾向があるが、その結果、被告人・弁護人は(捜査権が無いにもかかわらず、)無実の立証責任を負担させられることになっている。

ここでは、被告人や・弁護人がどんなに委曲を尽くして被告人の無実を主張し立証を試みたところで、官僚機構に住む人たちに対しては一向に通じないことがあることを現実の法廷が示している。』

以上(秋山賢三著「裁判官はなぜ誤るのか」より引用)

上記の秋山賢三氏の指摘は、片岡晴彦、私達支援者がこの裁判を通して体験してきたところです。刑事裁判において最初から無実の立証責任を、捜査権のない被告人側に負担させるなどということが、あってよいのでしょうか。

本件では、そもそも裁判官の検察官に対するハードルがあったことすら疑わしい。片岡晴彦や私達は、当初より無実の立証責任を負わされ、自分たちで「検察官立証」を覆さなければならなかったのです。「A白バイ警察官の証言」や「スリップ痕」や「現場見取り図」が十分に合理的な疑いがあるものであることを、再現実験の結果に基づいて主張してきました。片岡晴彦は、知力を尽くし汗を絞って無実を立証してきました。このあたりの説明は百聞は一見にしかず。参考資料としてDVDをごらんください

### 3 過去の判例を無視して、さらに安全確認義務の適用を誤った判決

最高裁判例(S41年12月20日)

交通整理の行われていない交差点を右折しようとした小型トラックが、交差点の中央付近でエンストを起こしたので、再びエンジンを始動し、左側方の安全だけを確認して時速約5kmで右折しかけたとき、右側方から原動機付自転車が来た。5メートルまで接近したとき、小型トラック運転者がはじめて気づき、急停止したが及ばず、原付自転車と衝突し傷害を与えた事故について、次のように判決を下した。

「自動車運転者としては、特別の事情のないかぎり、右側方からくる他の車両が交通法規を守り自車との衝突を回避するため適切な行動に出ることを信頼して運転すれば足りるのであって、本件被害者の車両のように、あえて交通法規に違反し、自車の前面を突破しようとする車両のありうることまでも予想して右側方に対する安全を確認し、もって事故の発生を未然に防止すべき業務上の注意義務はないものと解するのが相当である」として、被告人を無罪にしたのである。

その後この信頼の原則の適用を拡大し、たとえ被告人の側に交通法規違反がある場合であっても、信頼の原則の適用による安全確認義務の免除がありうるとした。

信頼の原則の適用上の要件として、これまで一般的に指摘されているのは、まず交通の円滑な運行の必要性という大前提の下に、道路、信号など交通環境の整備、および交通道德の普及による交通規則遵守の慣行の成立といった点が、一般的な前提的基礎とされている。

その上で、信頼の原則を排除する「特別な事情」としては、被害者が交通秩序に反する不適切な行動をとることが容易に認識できる場合(信頼してはいけなような被害者であることが外部的客観的に明らかである場合)。例えば歩行者においては、幼児、老人、身体障害者、酩酊者など交通秩序にしたがった行動を期待できないような場合。また、事故発生の危険性の高い場所である場合などがあげられている。

上記の最高裁判例に基づいて本件を検討します。

スクールバスが駐車場から国道へ出るとき、片岡晴彦は歩道前で一旦停止、車道前でも停止し左右確認、右方向(土佐方向)を視界の及ぶ限りにおいて見て、車両の来ないことを確認した。もちろん白バイの姿は微塵とも見えなかった。なお、この2回の一旦停止の事実は検察も認めている

○一旦停止位置からの右方の見通しは、第一車線が168m、第二車線約98mである。

○スクールバスが静かに発進したことは再現実験や生徒達の証言から明らかである。

すなわち片岡は停止すべき位置で停止し、右方の安全を確認した上で、国道車道内に進入したのであって、安全確認義務は尽くされている。

発進後、片岡は、右方から走行して来る車両については、その車両運転者が前方をよく見て前方確認義務を尽くしていることを信頼して、また事故を回避できる安全速度で走行して来ることを信頼して、分離帯付近まで走行すればよいのである。

それを原審判決文中で、柴田裁判長は『右方向から進行してくる車両等の有無及びその安全確認義務を課せられていたのは、車道に進入してから同車道の横断を終えるまでの間であって……』とあるが、この判決理由は片岡の注意義務を不当に拡大し、信頼の原則の適用範囲を著しく狭めるものであって交通社会に確立したルールを無視するものであり、最高裁判例に相反するものです。最高裁は判例と相反する判断をした事由によって、この判決を破棄しなければならないのです。

#### 4 片岡さん側の第三者目撃証言をすべて排除し、同僚白バイ警察官の「目撃証言」のみで書いた判決文

今回の裁判では交通裁判としては異例とも言える3人の被告側証人が法廷に立った

◇ 品原証人。

仁淀中学校品原校長は生徒達の安全を見守る立場から追走車を運転しスクールバスを監視して来た。品原校長はバスの後ろで衝突の瞬間を目撃している。そしてそのときの様子を法廷でと述べています

「私は法廷でも証言したのですが、スクールバスは間違いなく止まっていました。そこへ、なにかがもの凄いスピードで、右カーブをきりながらバスの右前にぶつかったんです。それが白バイだったということは後でわかりました。あの状況でどうやったらバスのブレーキ痕が1メートルもつくのでしょうか。これは、私の目の前で起きたことです。私は自分の目を信じます」

判決文がスリップ痕はあったという理由でこの品原証言を排除したことは、以下のことに関連してきます。

品原校長はバスの外から最も近くで目撃した重要な目撃証人であるにもかかわらず、調書を取るという名目で土佐署へ連れて行かれて、現場の実況見分に立ち会わされなかった。

このことは片岡さんを事故直後の実況見分に立ち合わせなかったことと共に、「事実認定に必要な地点の特定は、通常、被疑者を立ち合わせ、その指示説明と客観的な現場の状況とをにらみ合わせておこなうものであり、できる限り被疑者以外の者も立ち合わせることに配慮する」という警察官向けマニュアル『交通事故事件捜査』に反することであります。

このことは交通事故の相手当事者が警察車両であった場合に、一方当事者である被疑者や重要目撃者を排除して、警察官だけで実況見分を行ってその実況見分調書を作成することが許されるのかという問題であり、またその調書が裁判で有罪の証拠に使われることが許されるのかという問題なのです。これは全国のすべてのドライバーに関係してくる重大な問題であります。

また、事故当時、バスに乗車していた引率の教員も衝突時にはバスが停車していたことを証言しました。しかし、判決文は「5、被告人の原審供述等の信用性について」の(2)「品原信介及び証人Dの各原審供述」において、合理的な疑問が強く残るスリップ痕を根拠として、両名の証言を排除している。

その根拠とされているスリップ痕なるものが、不自然で不合理なものであることは私達が行った新た

に行った検証や新証拠において明らかになっている。控訴審ではそれら被告側の提出した新証拠を却下して、証拠調べもなく重要な原審証言を排除することは納得できるものではありません。

#### ◇B証人

白バイのすぐ後ろを軽四貨物自動車(軽トラック)で走行していた人物。その片岡晴彦と全く関係のないB証人の証言を、判決文は「供述者が、第三者であるというだけでその供述が信用できるわけではない。」と理屈にならない理屈をつけて、何の利害関係もない第三者Bの目撃証言を排除している。

これは屁理屈だと全国から批判が巻き起こっている。ジャーナリストの鳥越俊太郎氏も12月9日ザ・スクープで屁理屈だと批判し、同僚白バイ警察官A隊員の証言を「身内だから信用できないとも言える」のであると判決文を批判しています。

判決文は品原校長、B証人、生徒達など複数の目撃証言がある内で、同僚A隊員の証言のみを証拠とするもので極めて不公正な判決文である言わざるをえません。

以下に「証人Bの原審供述の信用性について」という判決文の誤謬を検討します

#### B証人の証言要約

- (1) Bは、事故現場よりかなり手前の点滅信号のある交差点のから、事故を起こした白バイが国道に進入するために停車しているのを目撃した。この時Bは、第1車線つまり左側の車線を高知方向(北方向)へ向かって走行していた。
- (2) 白バイが国道に進入するのを見た時、Bは軽くブレーキを踏んだ。そのときの車間距離は感覚で10m位。Bがブレーキを踏んで速度計を見たとき、自車は時速50～55kmであった。その後直ちに白バイは加速しながら第2車線へ入って行った。(大型バイクの加速性能をご存知とおもいます)
- (3) 白バイ隊員は腰を上げてシートに座り直すと加速を始め、事故現場手前のカーブ手前まで第2車線を走行していた。そして見えなくなった。自車の速度と比較して時速100kmは出ていた感覚である。
- (4) Bはカーブを過ぎた時にスクールバスを確認し、その時に白バイが衝突しているのを知った。Bは一旦停止して、他の車が歩道に乗り上げて通過するのを見てそれに習った。

この証言内容は、

○バス内の生徒「白バイが凄いスピードで走ってきた。」(2審にて、この生徒の証人申請は却下されている)

○品原校長「スクールバスは間違いなく止まっていました。そこへ、なにか物体がもの凄いスピードで、右カーブをきりながらバスの右前にぶつかったんです。」

○片岡晴彦「ロケットがぶつかったかと思った」

という証言らと合致しているのです。

以上のことからB証人が白バイのすぐ後ろで高速運転の白バイを目撃したことは事実であると考えすることは十分に合理的です。

しかし、原審判決文は軽トラックの10m前に白バイがいきなり進入したと、そういう書き方をしている。そして、そのときのB証人の運転態度、つまり白バイが進入したときのB証人の運転態度は不自然極まりないと断定している。それを理由にB証人の証言は信用できないと排除した。

B証人はわき道に停車して、国道に進入しようとする白バイを発見して注視していたところ、その白バイが道路左、10mほど前に加速しながら流入して来たので軽くブレーキを踏んだ。その車間距離は安全な距離と思った、と証言している。

また、進行方向左側から国道へ流入しようとしている白バイを見たら速度計を見るのは普通です。白バイが進路変更の合図をして加速し軽トラックの前方に流入しようとするのを見て、軽トラックのB証人は白バイを進入・流入させるため、軽くブレーキを踏み減速して、進路をやや右に変える。この運転態度はなんら不自然な点はない。

判決文中で柴田裁判官が「10mの車間距離」に執拗にこだわるのは、現実の道路での車の流れを知らないからであり、10m手前に進入した白バイに危険を感じないのは不自然といった予断を持っている。

しかしながら 大型トラックならいざしらず、白バイが予知される動きで10m前方に進入した以上は危険を感じることもなく、それに対応できるのである。そして、その後、B証人は何秒間か白バイに追従しながら、自車と遠ざかって行く白バイの速度を比較して速度証言をしている。

この白バイの速度を目撃した状況は白バイの国道進入時の状況とはまったく別の場面であり、たとえB証人の運転態度が不自然でも、それをもって証言を排除する理由にはならない。極めて恣意的な判断です。

#### 四、片岡晴彦や品原校長を排除し、同僚隊員ら警察官だけ行った現場検証・実況見分（判決文「1、上記2条のスリップ痕様のものの存在とその由来について」）

片岡晴彦は事故当日、現場から警察署に引致され、事故発生から一時間半も過ぎた午後4時過ぎに現場に連れ戻され、導かれるままに警察車両の中から「現場検証」を行っている。しかし、その検証時には、すでに双方の車両は撤去され、なにもない事故現場での実地検証、それもパトカーの車中からの実地検証でした。

**特に重要なことは、本件の最大の争点であるスリップ痕の指摘や確認はまったくなされていなかったことです。通常の交通事故捜査なら、重要な証拠は確認させることは基本中の基本です。**

本件は事故の一方手当事者が県警交通機動隊白バイ隊の白バイ隊員であるという特殊なケースであった。本来ならば誤解を受けないように、捜査はつとめて公平に行われなければならないはずであるが、今回は一方的に偏った捜査方法がとられたのです。

警察官向けのマニュアル『交通事故捜査』には「事実認定に必要な地点の特定は、通常、被疑者を立ち会わせ、その指示説明と客観的な現場の状況とをにらみ合わせておこなうものであり、できる限り被疑者以外の者も立ち会わせることにも配慮する」とあります。

しかしながら、今回の事故における現場検証は、一件の交通事故としては異例の40人もの警察官を動員して広範囲に渡って監視体制を敷き、被疑者とされた片岡晴彦を逮捕し土佐署に連行するなど、現場から実質一時間半も隔離した。

さらに最も近くから衝突の瞬間を目撃した品原校長をも土佐署へ連れて行き、片岡晴彦と品原校長を現場検証・実況見分から排除して、事故当事者と関係のあることが明白な同僚の白バイ隊員のみを目撃者として立ち会わせただけで 現場検証を行ったのです。

このような偏った現場検証によって得られた証拠をもって裁判が行われることが許されてよいのでしょうか。

そして警察は、最後まで事実認定の根幹となる証拠のスリップ痕を片岡晴彦に示さずに、調書を仕上げ、捜査を終了しました。そのことは高知地裁に提出された実況見分調書の中に通常あるはずのスリップ痕を指示説明している片岡さんとスリップ痕が同時に写っている写真がないことからわかります。

このこともスリップ痕が現場になかったことを説明する状況証拠です。

今回の上告に対する最高裁の判断は国民の多くから注目されています。

法治国家としての日本を問われていると言っても決して過言ではありません。

**最高裁判所の公平な審理をお願い致します**

この事件における一審・二審裁判と警察捜査に関する私達の疑問はまだありますが、 以上の内容における怒りにも近い思いをお伝えしたく、ここに要望書を提出いたします。